

博士学位申請論文審査報告要旨

申請者氏名	清水 智史
学位の種類	博士(文学)
論文題目	谷崎潤一郎研究——古典回帰と「観光のまなざし」——
審査要旨	<p>本論文は、明治から戦後にいたるまで、長期にわたる谷崎潤一郎の文学活動のうち、一九二〇年代から三〇年代にかけての小説・評論を中心に、都市や観光という視点から新たに読み解こうとしたものである。この時期は、谷崎が関東大震災を契機に関西に移住し、関西の風土と文化や古典に触発された作品を多く執筆したことから、谷崎文学の一転機をなす時期で、一般には古典回帰の時期と呼ばれているが、それに対して論者は、この時期の作品を同時代の文脈に付置き直すことで再検討することを試みている。すなわち、「蓼喰ふ虫」「卍」「吉野葛」「盲目物語」「蘆刈」「陰翳礼讃」「春琴抄」などの作品を取り上げながら、この時期の作品には観光地の表象や旅をする登場人物が少なからず描かれていることを丁寧に確認し、その背景にある同時代の観光産業の隆盛や観光事業の振興との関わりを掘り起こしている。それらを通して、古典的・反近代的とされるこの時期の作品に、きわめて鋭敏な同時代意識の表出と批評性を見いだすに至っている。論文は三部構成で全八章、及び序章・終章・参考文献一覧・初出一覧からなるが、以下に各章の概要と達成点を示す。</p> <p>第一部「観光との邂逅と懸隔」では、関西移住後まもない作品をとりあげ、古典回帰と観光が交わる端緒を明らかにしようとしているが、第一章「案内と彷徨——中国体験におけるツーリズム——」においては、谷崎の二度にわたる中国体験とその意味を考察し、従来「支那趣味」の文脈で語られることの多かった中国体験を、同時期におけるツーリズムとの関わりで再考することを試みている。また第二章「外縁と逸脱——「蓼喰ふ虫」と小出檜重の挿絵について——」では、新聞連載時における小出檜重の挿絵に注目し、作者と画家の共同作業、ないし対話を通して、旅の営為の意味が問い直されていく様相を、豊富な図版とともに具体的に検証している。続く第三章「記号と冥闇——「卍」における関西表象について——」では、「卍」の主要人物である園子と綿貫を対比的に捉えることで、近代化する関西の都市文化、消費文化への批評性を指摘している。</p> <p>第二部「観光と歴史消費批判」では、観光と歴史に関する問題を検討し、当時の小説の多くに登場する歴史的題材と同時代における歴史観光の流行、すなわち観光による歴史消費との関連や接点について考察をおこなっている。まず第四章「紙片を再興する——「吉野葛」における歴史探訪と観光——」においては、一九一〇年前後と三〇年前後という二つの時間軸で展開する物語の構造を確認しつつ、この間の一九二八年に創刊された『旅と伝説』に代表される歴史探訪の流行などを視野に、吉野を訪ねる「私」の旅がもっている同時代的な観光のありかたとの近接と懸隔が剔出されている。第五章「葛藤と盲目——「盲目物語」における琵琶湖と観光——」では、織田信長の妹お市と盲目の按摩師弥市の交流を中心とする歴史小説「盲目物語」を取り上げるが、従来、谷崎のいわゆる「盲目もの」の一つとして視覚や音声の問題を中心に論じられてきたこの作品について、論者は作品の舞台としての琵琶湖の表象と一九三〇年代の「大京都」言説の拡張下における琵琶湖の観光地化との隔たりに目を向けることで、同時代における歴史消費への抵抗の一端をこの作品に見出している。続く第六章「消費と消失——「蘆刈」における歴史消費と観光——」では、語り手の「わたし」が歴史の舞台であった水無瀬の里を訪れる物語において、古典的イメージと強く結びついている風景の描写を可能にしたものが当時の鉄道網の発達や観光ガイドブックなどの存在であり、そこで「わたし」が会う「男」の「お遊様」をめぐる懐古的な語りとの対比を通して、同時代的な観光の要素を相対化する批判的な契機を見出している。</p> <p>そして第三部「浪漫的な語りへの抵抗」では、こうした谷崎のテキストがもつ同時代思潮への批評性を明らかにするため、「春琴抄」と「陰翳礼讃」を考察している。第七章「陰翳を凝視する——東京批判と「陰翳礼讃」</p>

申請者氏名 清水 智史

——」では、「陰翳礼讃」の背景に関東大震災からの「復興」を揚言する虚妄な言説への批判と、「陰翳」を凝視する徹底的な認識の深まりを見出し、同時代の日本・古典回帰的言説に回収されないこの評論の独自性と意味が指摘されている。さらに第八章「雲間」を仰望する——「春琴抄」と「煙の都」——」では、『鴟屋春琴伝』という書物に仮託して語られる物語が内包している閉塞性とともに、それを打ち破ろうとする開放への志向が見出せること、そのことが「大大阪」を謳う一方で閉塞的な状況を現出する同時代の大阪という都市への批評性に通じることを論じている。

これを通して、本論文においては、一九二〇年代から三〇年代における谷崎のテキストにおいて、谷崎のいわゆる古典回帰が同時代の「観光」と「観光」をめぐる言説との関わりのなかで醸成されたことを指摘して、従来の谷崎理解へのあらたな問題提起をおこなっている。また、こうした古典回帰期の谷崎のテキストが、同時代における観光振興や観光産業の発達と、それと密接に関わる鉄道網の発達や出版事業の隆盛などを積極的に摂取するとともに、そうした思潮や文化的傾向に対する強い批評性を帯びていることが明らかにされている。すなわち、古典回帰期における谷崎のテキストに観光批判の契機を見出したこと、それが「日本」的、歴史的なイメージの付与と消費を促す観光産業への批判に留まらず、戦争の時代に向かう一九三〇年前後の歴史をめぐる言説や、「国民の物語」形成への批判ともなり得ていることを見出すに至ったことは、極めて蓄積の多い谷崎研究の従来の成果を十分に踏まえながら、確実にその理解を一步前進させたものとして評価できる。

公開審査会では、こうした点が評価されるとともに、一方において、「観光」と「ツーリズム」、「支那趣味」と「オリエンタリズム」といった用語や概念の曖昧さと恣意性が論旨の明確さを妨げている点があることが指摘された。また、副題の「観光のまなざし」はジョン・アーリ、ヨナス・ラースン著『観光のまなざし』の概念に負っているが、論者がこれを実定的な「観光」のありかたにおいて捉えているのに対して、「観光のまなざし」というコンセプトをよりブラッシュアップし、登場人物の身体性や認識のありかたを考えるメタファーとして捉えることの必要性が強く指摘された。さらに、一九二〇年代から三〇年代にかけての谷崎のテキストが、むしろ消費主義的な登場人物やその身体のありかたを描き続けており、一概に歴史消費への抵抗と批判のみの視点では捉えられず、それによって谷崎の批評性や思想性を特権的なものとして強調する結果になることへの疑問が提示された。こうした指摘を踏まえて、「観光のまなざし」という概念を、テキストの内在性において、テキストの論理として把握するためには、本論で十分に触れられていない小説の語りの問題や、検閲の問題をも視野に入れた本文の異同に関する検討が必要不可欠になるだろう。しかしこれらは、本論文の欠点というよりも、今後著書としてより効果的に成果を提示するために検討が求められる課題というべきものであり、これらの課題を踏まえて、今後の研究をさらに発展させていくことが期待される。

以上のように、本論文は、一九二〇年代から三〇年代の谷崎潤一郎のテキストを、果敢な問題意識をもって、従来の古典回帰としての位置づけから一步を進め、「観光」という新たな視点から同時代への谷崎の積極的な関与と批評意識を読み解こうとしたもので、新たな小説読解の可能性を提示するとともに、従来の谷崎研究を前進させた優れた成果であると判断される。従って審査委員会は、全員一致で、本論文が「博士(文学)」の学位授与に値するものと認定する。

公開審査会開催日	2023年 1月 18日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	宗像和重	日本近現代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	坪井秀人	日本近現代文学	文学博士(名古屋大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	十重田裕一	日本近現代文学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鳥羽耕史	日本近現代文学	博士(早稲田大学)
審査委員	教育・総合科学学術院・教授	五味洵典嗣	近現代日本語文学・文化研究	博士(慶應義塾大学)